

生家の建物

二十九回生 堀田 暁生

私の祖父堀田宗一は大阪住宅経営株式会社の取締役であった。その関係もあったのか、千里山に家を建てた。その家で私は生まれたが、祖父はすでに他界した後だった。家の敷地は当初五〇〇坪余あり、三棟が敷地の真ん中に建っていた。一棟は客間・応接間・便所を擁する建物で、もう一つの棟は主に生活をする建物で部屋が数室あり、仏間・台所・食堂・浴室・便所などがあつた。最後の棟は離れであり、一〇畳と六畳二つおよび納戸からなつていた。この三棟は渡り廊下等で繋がつていた。全部で一〇室以上あつた。この三つの棟以外に蔵が一棟あつた。

千里山でも有数の広い敷地があつたといえる。道路に沿つた門から二〇メートルほど入つたところに玄関があつたが、これは車が乗り入れるようになっていたからである。家が建つたのは昭和三年（一九二八）のことで、自動車もあまりなかつた時代では、珍しい

作りといえるだろう。この客間棟について少々触れてみる。

玄関の前には石畳が敷かれ二本の柱が屋根を支えていた。玄関の中はやはり石畳で、式台があり、控えの間があつて、すぐ横に洋室の応接間があつた。応接間からドアを開いて玄関にもおけることもできた。応接間は、床が寄木細工になつており、洋風窓があり、その一部はステンドグラスであつた。天井は漆喰が塗られ、シャンデリアがさがつていた。この応接間には祖父が学んだ福沢諭吉の胸像が飾つてあつた。控えの間から応接間の前を通つて座敷まで畳み廊下があり、座敷は床の間と縁側、それに押し入れを持つ八畳の広間だつた。座敷に入るところに生活棟に通じる廊下があり、そこには大きな一枚の扉があり、上半分は不透明の大きな硝子であつた。別に意識することもなかつたが、今にして思えば、そこに境界をつくつていたものであろう。扉の横に来客用の便所があつたが、トイレ張りの水洗便所になつていた。これも、当時の千里山では数例しかなかつたと思われる。

敷地の真中に建物があつたので、周囲はすべて庭で

あるが、東側は斜面になつていて、そこに柿・イチジク・栗などの木が植えられていた。柿の木は数本あり、秋になると竹竿で柿の実を採つた。斜面には孟宗竹も生えており、毎年春には筍が生え、それを掘つていた。ただ、庭の手入れが大変だつた。父は大工仕事や庭いじりが好きだつたのか、やむを得ずそうしていたのかわからないが、家にいるときはたいいて庭仕事をしていた。広いが故に雑草もよく生えたからである。敷地が広いということは、当然固定資産税も高かつたに違いない。それを何とかやりくりしていたのだと思う。父が相続した後、事情があつて敷地の一部を売却したが、それでも四〇〇坪近くはあつた。戦後、昭和三〇年代までにはいくつかの台風が襲来した（中でも、ジェーン台風と第二室戸台風は大きな被害を与えた）。家が損壊を被ると言うことはなかつたが、雨漏りはたびたびあり、その修理が大変であつたし、ひさしの雨樋を交換するのも数年を要したことを覚えていゝる。建物が大きいだけに、一度にすべてをすることは無理だつたからである。

平成時代になり、バブル経済の影響で千里山の地価も急騰するようになった。そのときに父は、このまま

では相続するときに大変になると考え、その策として、敷地を売却して負担を軽くし、売却益で賃貸マンションを建てるということを考えた。幸い、この計画はうまくいき、敷地の半分ほどを売却し、残つた敷地に新しく居住棟（一部賃貸部分あり）を建てることができた。それが現在も住まつている家である。

築後六〇年は経つていて、建物の構造も保存すべきものとは思つたが、「背に腹は代えられぬ」の心境であつた。愛着もあつたが維持管理のことを思うと、やむを得ない決断だつた。